

執筆者

詩一篇	小林直人
歌三篇	後塚青一
詩二篇	栗田不藏次
詩二篇	中野大次郎
詩一篇	高瀬勝男
詩一篇	小林 貞一
詩二篇	松本 健一
詩二篇	三野 健地
詩二篇	松村 清
詩三篇	中野 勇雄
詩一篇	横田重子
詩一篇	高橋水聲
右記	

詩

小林直人

冬の芽の住家は樹木だ
冬の芽が僕を見てゐる
鏡のやうに僕を見てゐる

チカ／＼と冬の芽が生長するのは

きまつてこんな夕景の巷だ

僕の愛玩は決してしまつて

硝子張りで塗られた魚腹だ

冬の芽は

石と鋼とにピツタリひつついて

こんな晩から吠え初めるのだ

——二二八——

短誦（三篇）

段塚青一

蛾 A

夜の草が青くつぼんでゐる

蛾 B

掌ほどの蛾が青さめた指で
灯をのみ消した

蛾 C

月の鱗が散った

詩二篇

栗田不羈夫

柳

ザンとまだれ落ちた緑を
ああ柳はからだ中にびつしよりしみこんだ
初夏のさくらめかしの日光の中に
静かにまだれ落ちた柳の樹々

いなづま

さつと斜に庭の暗闇を切り
おお激痛不沈黙
鋭く 快叙のやうに鋭く
私の胸をづぼりと突き差してけつた光
あつ光り又光り！
私はがりんと心を光らして止つた

空 虚

中野大次郎

空の一点をみつめるころに
たかく泳ぐものあり
「憂鬱なる生活の反響をつよくかへす・工兵隊
あたりの空気がするとく 鋭くさけんでゐる

乱 舞

心失せてうつろひなる影を
赤き火の炎え立つ中にうちすてて知らず
赤き火
かゝ秋の月の光に
踊る 夢魔はしきり踊りつづける

詩

高瀬勝男

冬冬冬冬
冬眠

百姓は土にかじむ
大きくつかれて
瘦れて

無題詩

小林 賢

夢^幻死軌道を走る展望列車
人生の走馬燈
心の持ち出す赤い櫛の磨擦
腐った脳漿の水
黒の観音門

夜は更ける

苦悩の壁に死体

子供

松本純一

ねむの眼をこすりこすり
子守唄をしゃべつて眠つた
おんみよ
ねんごろにださしめた
のねの穂は汗ばんで
今にもうかれさうだ

列風

電柱をよぎ登る柿の喊聲！

水・水

三野混沌

水 水

土にのさる

うちみにながれる

ただしく動くもの

うんとでり

暗の土

土の闘争をなくせ

飢餓はおれらを掩ふ

水 水



たひらな土におどりだすおれた

きたなのからだを

土を耕し掘るにだのなしにする

だのなしにするだ

性 息

たひらな土に

おどり出すおれた

土からむつくりとでた女
がおれをみる！

詩三篇

松村清

さつきかりの食後は
もうつふんなさうに海に話しかけてゐる

あみださまのやうにあつたかひ砂が
うれしくて　うれしくて

おれはどんな羽をせをつた
こん虫のやうにとんで

すばりしの考へである

風のやうな屋空ではあるが

歩いてゐるのは俺ひとりぞ

○

ふふんと　ぶら下げたあ
大根足をぶりと噛った

あの夢さ！

泡沫的な象景

中野勇雄

ぐきぐきッ
彼の女の清純が僕の首を巻き締めてゐるのだ！
へんな南風のやうなくすぐったさがわき腹から背すずへ
流れてゆく――

肌は竹藪だ

秋

孤獨よ

こんな夜にも月とじつ懇になれてうれしい
頃などあれば尚更だ――

月夜

眼鏡へ月がとまるので
うれしくなつて表路を帰つてきた
眼鏡をはずさずに寝て了ふんだ！

嗤つてみる

柳田重子

よほう——路を通つてゐる、はか

高坪の上でも
この通り、私の先は決して踏み外さなれ。

よほう——ばかり

……ですがね
何となく

つまされます、よ……。

よ、よほう——ばかり

よ、ほう……。

愛

高橋水聲

はなれたことが
このふにこんな
心たりをひきあはせるものか
あんな供よ
おれあまつたくあやまつてもいい
あまへがこひしいことで
いつばいになつてしまつたんだから

おなじく

こひしいことと
こひしいことが
しつかりだき合つてだき合はさつて
じつと眼をつぶつたひしてみる
だが、あちそれがたまたまの
たまたまなくぢれつたひのこと系のだ
むづむづからだをゆすつてみたり
おれあ子供とけふものを
どうすることも出来ないでゐる

おなじく

手と手と
きつちうだき合つても
こゝろにこひしの仲だつたなら
あゝさうするおれは
子供とのふそのを忘れてゐる。

をさなご

ぞうつと なすりつける
子供のほほつべたは
わが終つたつきたての餅か
小つくら小きれあかつた
おれははつきりかぢりつきたの

— 后記 —

- × 先づ詩社に投稿を知らせする、便利の爲めと
 ころだ（常盤線、東武線、北千住駅下車、東口、南口所より
 歩行五分）尋ねると、する方は前以て通知があれば、詩
 社へ来るは、あてまんと、お話しのもてなし位なら出来る
 ことと思ふ
- × 香車大輔大いん後れたことは、済まないので、移転
 や何かが原因にまつてのこと、御了承を願ふ次第
- × 後れた代りとして、おまのりやつが集まつてきたこ
 とがうれし
- × 詩社、石川武夫氏のが見えなりのが、残念とする、来
 稿の多量を行つ
- × いづつあふん／＼生土の香のするものを、寄せてくれ
 る三野、泥地氏、氏は今度愛媛へ、を来て、詩社、百姓
 を出すさうな、みなさん、大なる期待を、持つて待つて
 ゐても、構はずなからう
- × 詩情熱心詩人、高瀬、勝男氏の詩集出版のことを、ほ
 のかにきく、重々／＼の芽出たの、ことと、祝福して、止ま
 まい
- × 近々、故山、村喜鳥氏の全集が出版され、と、きく、この
 機を、少し、天啓、新年号は、此の追憶号を出す積り、これ
 が執筆と、遺稿（未発表のもの）など、についで、回下、奔走中、
 詩人として、故山、村喜鳥を愛するお心得の、ある方は、之
 に、因む、一篇の、御寄稿を、望んで、お

・次号原稿締切十二月二十日・

大正十五年十二月二十八日印刷
 大正十五年十二月一日発行

編輯兼
 發行人 高橋水聲

發行所

・香車詩社・

東京市外北千住馬下、弥五郎新田二六

